

【論文要旨】

【研究目的】 本研究は、難治性在宅統合失調症患者（以下、患者）が支援者と繋がり続けるために熟練訪問看護師（以下、看護師）が提供している看護技術を記述することを目的とした。

【研究方法】 クロルプロマジン換算で 1000 mg以上の抗精神病薬またはクロザピンによる治療を受け、3 か月以上地域で生活している統合失調症患者を受け持つ、訪問看護師経験 3 年以上の訪問看護ステーションに勤務する看護師を対象として、訪問場面での援助について半構造化インタビューを行った。得られたデータを看護技術の先行要件として存在していた患者の状態と、看護師が用いていた看護技術の 2 点に焦点を当てて分析した。継続比較分析を用いて、抽出された各データを看護援助のプロセスに沿って絶えず比較し、違いや普遍性、関連性を検討しながらカテゴリーを生成した。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会（承認番号 14-019）と研究協力者の所属機関の承認および対象者の同意を得た後で実施した。

【結果】 首都圏 5 施設の訪問看護ステーションに勤務する、10 名の看護師にインタビューを実施した。分析の結果、患者の状態を表す 6 のカテゴリー、患者が支援者と繋がり続けるために看護師が行う看護技術として、1 のコアカテゴリー、6 のカテゴリー、14 のサブカテゴリーが抽出された。患者は、精神症状の悪化と緩和を繰り返しており、そうした経過の中で支援者との繋がりやの程度が弱まったり強まったりしていた。また周囲からの孤立が精神症状の悪化を招き、精神症状の悪化が孤立を招くという悪循環を起こしており、看護師の技術は、そうした患者の状態や悪循環に合わせて提供されていた。看護師は、{ 患者と支援者の安全を保持することで両者の孤立を防ぐ } という技術をコアカテゴリーとし、《看護師・支援者と患者がお互い安全な距離で近づく》、《患者の信頼を得るために患者の世界を共有する》、《患者を支えている支援者への援助に比重を置く》、《患者の現実的な行動を促すために実行可能な行動に焦点を当てる》、《患者と支援者の希望を看護師が双方へ代弁する》、《患者と支援者が無理なく関わられるように補助する》という技術を用いて、患者に対する支援者からの援助が途切れないように支えていた。

【結論】 患者は、統合失調症急性期の状態が持続しているため、自我機能の脆弱性に着目して支援に臨むことが重要であることが示唆された。また、緩和困難な精神症状があるため、患者と患者を支える支援者は社会的孤立の状態にあり、特に患者を主となって支えている家族は大きな負担を抱えているため、患者と同居している家族がいる場合、家族支援が重要であることが示唆された。